

RCAST

Research Center for Advanced Science and Technology

NEWS

102

2018



助教座談会02

悩める助教の胸の内

先端研探検団Ⅱ file 22

「先端研発・超人スポーツ」開発の舞台裏 ■ **未来の先端人たちへ**

Relay Essay 先端とは何か 第23回

身体情報学分野 稲見 昌彦 教授



東京大学 先端科学技術研究センター
Research Center for Advanced Science and Technology
The University of Tokyo

悩める助教の胸の内

RCAST NEWS 100号に特別企画として登場した『助教座談会』。実は参加者からも「ざっくばらんに研究や先端研の話ができる」と好評を博し、第二弾が行われました。明るい話が展開された前回とはガラリと視点を変え、今回は先端研での“つながり”について、心の叫びともとれる実感を語り合う場となりました。

理論化学分野 助教
渡邊 宙志

代謝医学分野 助教
榊原 伊織



政治行政システム分野 助教
佐藤 信

生命知能システム分野 特任助教
白松 知世

Hiroshi Watanabe

Iori Sakakibara

Shin Sato

Tomoyo Shiramatsu

所内コミュニケーションの今

渡邊:僕は初めて東大に着任したのが工学部です。同じ東大でも先端研と本郷は全く違うと感じました。本郷が伝統的なのに対し、先端研はものすごくオープンな印象です。

佐藤:僕も本郷で伝統第一のような法学部の出身です。たしかに先端研は自由で、ルールがないのでは？と思ったくらいです。

榊原:たまに本郷へ行くと人の多さにびっくりしますよね。人口密度が全然違います。学生が少ないのは先端研の大きな特徴かもしれないですね。

白松:やっぱり研究してなんぼという空気があるんでしょうか？

渡邊:ラボ内でも学生がいないと肅々と研究に専念できるけれど、逆に学生からエネルギーをもらって自分のモチベーションにつながる時もあります。飲み会が少ないというのも先端研の印象ですね。個人的には月に1回開催されるハッピーアワーが楽しみです。ただ、日常的には思ったほど他のラボとの交流はないですね。

佐藤:助教同士ですら会う機会がほとんどないですからね。

榊原:生物医化学に属するラボ間ではかなり交流があります。ただ、他のラボとはやっぱり交流はないですね。

白松:私のラボのPIは二人とも、先端研内の人脈だけでなく独自に築き上げた人脈で合同セミナーを開いたり外部から講師を呼んだりしています。異分野が集まる先端研だから隣のラボと合同でセミナーをする、ということはほとんどないですね。個人的には研究室に引き込まれているので、所内を散歩するのすら躊躇します(笑)。

渡邊:もしかして、この環境は研究に集中するためのデザインですか？

佐藤:いや、それはないでしょう(笑)。

榊原:僕たちは、ラボ間での物の貸し借りなどがけっこう頻繁にありますよ。

白松:あ、それはかなり羨ましい…。

佐藤:榊原さんが所属するラボは、総勢100人以上の研究者が集う「システム生物医学ラボラトリー(LSBM)」の1つですね？ LSBMは医学系だけでなく情報系など異分野のラボが集まっているのに、すごくうまくつながっている感じがします。個々のラボは独立していてもLSBMが1つの組織になっている。先端研の中では他に例を見ない有機的な関係というか。そういった形でないと、教授たちでさえ10年任期がある先端研で、ましてや任期の短い助教だと、何かを軸にしてみんなが集まったりつながったりしにくい環境なのかなと思います。



立ち話が羨ましい

渡邊:最近では、谷内江先生の提案でハッピーアワーができて所内交流が進みつつある気がしますが、研究の内容を深く話す場というより、まずはどんな人が所内にいるのかを知る段階ですよ。

白松:「お友達から」みたいな。

佐藤:僕は、最近あまり顔を出していないんです。僕が先端研の中でもマイノリティな社会科学系の所属だからかもしれませんが、お互いにも研究分野が違いすぎて、自己紹介や研究紹介だけで時間切れになっちゃう。研究室で固まって話す人も多いし。

白松:私は、まず会う頻度を高くしないと忘れちゃって…。以前に助教の会*1に参加した時も「こんな人がいるんだ！」と気持ちが盛り上がったのに、その後の日常に流されてつながらなかった。単なる顔見知りから一歩進むためにはどうしたらいいのでしょうか？

渡邊:研究分野が近いラボが身近にあれば「今度の学会行く？」とか「面白い結果が出た？」といった話ができるけど、先端研はラボの配置がアットランダムなので、廊下で会った人にどの程度深い話をしたいのか、どこを越えてはいけないのか、石橋を叩きながら3年経って、未だ右も左もわからない状況です。助教同士の立ち話で公募の話があってもいいと思うんですけどね。

榊原:僕は結構ありますよ。それこそ立ち話で「あの公募に出した？」みたいな話をします。

白松:あ、それはかなり羨ましい。ふらっと出会った方に公募の話をしているのかもわからないです。

佐藤:やっぱりLSBMは特異なんですよ。

榊原:そうか、違うんですね…。

渡邊:情報源がポストだけというのも関係ありますか？

佐藤:僕も同じですよ。

渡邊:もしかして情報が入ってくるチャンネルが限られていることが大きなデメリットかもしれない。僕はむしろ外部からさまざまな情報をシェアしてもらおうので、それを助教同士の横のつながりで共有できるだけでも変わる気がします。

分野を超えた“同士”をどう作るか

佐藤:30周年記念式典で岸輝雄元センター長が「先端研は“研究者の楽園”になって欲しい」という講演をされていました。今の先端研は教務が比較的少なく恵まれています、専門分野外の教員などとのコネクションが少ないのがデメリットかもしれないですね。

榊原:LSBMは1つの建物の5フロアに集まっているので、共同研究をしたり、実験器具を貸し借りしたりして、研究環境にはかなり満足しています。今の生物学ってどんどん大掛かりになっていて、シーケンサーなども1億円したりします。LSBM内で優れた高額な設備を所有されている先生がいらっしゃって、それを気軽に高い頻度で使えることにはかなりのアドバンテージがあると思います。個人的には“研究者の楽園”に近いと思います。

白松:先端研にどっぷり浸かるのは研究面ではいいですが、研究を発展させるという面から見ると、自分で気になる学会へ出かけて行って友達や知り合いを作らないと広がらないし、ポストの情報なども入りにくいと考えています。外の環境は雑務が発生するなど別のデメリットはあるけれど、ちょっとうるさいくらいの枠組みに入ったほうが有益な情報を得られそうだと感じています。

*1 助教や特任助教など若手研究者を対象とした交流会

佐藤: 僕も基本的に、先端研は研究環境としてすごくいいところだと思います。ただ白松さんがおっしゃった通り、コネクションをどう作るのか、ですよ。先端研は「多様な分野が集まっているから研究がより発展しますよ」というビジョンですが、実際にはそれを実現する、要は分野を越境するためのコネクションをどう作っていくかが、正直あまり見えてこないんです。教授会に出る先生方はさておき、僕たちにとって先端研だからこそ得られるコネクションとはどんなものなのか。以前、児玉先生から「10年で本郷に戻る“還流”の先生でも先端研でできたコネクションが生きているから、たとえ全く分野が違って“先端研的なもの”を共有している人たちが先端研の外にすることが重要」という趣旨のお話を聞いたことがあります。僕の勝手なイメージでは、「あの時、一緒に先端研で自由な雰囲気共有した、新しいことに挑戦するマインドを持つ人」が所外にいる状況を10年後や20年後に作ることでできれば、それでいいのかなと。そのためには助教の会を定期的に開催して、「顔見知りでしたよね？」というレベルにはしておかないと。20年後に渡邊さんに会っても「誰でしたっけ？」って言われたら…ちょっとショック(笑)。

渡邊: このままだとありえる未来かもしれませんよ？(ニヤリ)

佐藤: そこが心配なんです(笑)。



任期について、僕たちの本音・その2

佐藤: 前回の座談会では先端研について明るい話題が展開されていました。今回は敢えてシビアな視点で話し、今後のヒントが見つけれればと思っています。任期制については、みなさんどう考えています？

渡邊: 個人的には、PIに任期付きが多いというのは珍しいですよ。若手は任期付きで皆さんも苦労されていると思いますが、そういう意味では下の人に任期を課すだけでなく自分たちも流動的というのはフェアな感じがします。

榊原: 僕の任期はプロジェクト期間と同じなので、僕だけが任期延長に

なったとしても、プロジェクトメンバーの任期が終わって彼らがいなくなってしまうと研究が続けられない可能性があります。きちんと決められた任期で終わったほうがいい気がします。

佐藤: 還流の先生は本郷に戻るので厳密には任期とは違いますが、自分の上にいる先生が「この10年で研究成果を出さないと」という圧力を感じているとしたら、それは下にも負荷がかかるのかなと想像します。

白松: 想像の域を出ませんが、かかるんじゃないですかね？

榊原: やっぱ、それはかかると思います。

渡邊: 僕も着任した時にそう考えました。

佐藤: 雑務が少ないから先端研にいる間に何か成果を出さなければいけない、とみんなが焦っているというか…。

渡邊: それが交流の少なさに関係しているのかもしれないですね。つながる機会があっても「研究に専念したいから」というのはある気がします。

白松: ちなみに、キャンパス公開で他の研究室を見に行ったりしますか？

渡邊: 怒られそうですが、かき氷に釣られて隣の生研に(笑)。台風の風速実験とか体験型が多いのも面白いです。

榊原: キャンパス公開自体に、全く参加していないです。

佐藤: 僕は研究室見学より、助教が企画運営するセミナーやクイズ大会のプロジェクトを通して親しくなった若手研究者とのコミュニティが役立っていますね。オフィシャルな機会でもない限り、なかなか密に交流できないので。

渡邊: 僕もメンバーでしたが、たしか佐藤さんに指名されたんですよ？

佐藤: いろいろなところで渡邊さんを指名しています(笑)

渡邊: ありがたいですよ。声をかけてくれるのが佐藤さんしかいないので。先端研でようやくつながっている細いクモの糸が佐藤さんです(笑)

「まずは、お友達から」

佐藤: そんな現状ですが、みなさんは先端研にいる期間をどのような長期的視点で考えていますか？

榊原: 僕は先端研で確実に研究できるあと2年のうちに、できる限りのことをしたいと考えています。筋肉のエピゲノムの研究を進めたいので、最先端の実験設備が素晴らしく整っている先端研にいるうちに、いい研究をしたいです。

渡邊: 僕は「水」を理論的なシミュレーションで解き明かす研究をしています。出身は物理ですが、理論化学、生物、物理の境界領域です。先端研は境界領域の研究がものすごくしやすいと思っています。いま作っている理論はとても汎用性が高いので、純粋に物理や化学、生物を研究する人たちはあまり興味を持たなくても、先端研の人たちには興味を持ってもらえるのではと勝手に期待しています。ただ残念なことに、実は僕、まだ一回も先端研で研究のプレゼンをしたことがないんですよ。それでも、先端研には潜在的に需要があると感じます。何か一緒にできる人がいないか、



残りの任期でその開拓ができれば理想的だと思っています。

白松: 渡邊さんの話を引き継ぐと、伝統と息苦しさは表裏一体で、新しいことをしようとする「ここでの基本のやり方」を押し付けてくる偉い人がたくさんいるような気がします。先端研ではそんなことは全くなく、自由な発想ゆえに変な方向に走ってしまうことも多々ありますが、それでも不当に怒られないのは本当に大きな魅力です。私の研究は、なぜ脳は音楽を心地いいと感じるのかというかなりのマイノリティにも関わらず、面白いと言ってもらえることはあっても批判されることはほとんどありません。先端研にいううちに自分の研究を宣伝しておく価値はあるかもしれない。具体的な共同研究ができるほど相性のいい方に出会えるかはわかりませんが、宣伝することはできるし、友達を作りたいと思います。

佐藤: その気持ち、すごくわかります。自分のやりたいことを無理やり曲げてでも、とにかく先端研の人と共同研究をするより、まず友達を作って、外に出た時に面白い展開ができるように今から研究を貯めておくといった準備ができればいいのかなと思っています。

渡邊: 助教の会を開こうという話は本郷でも出ますが、2年くらい動いていませんね。若手の人たちは自分が生きていくことで精一杯なのか、研究に汲々で余裕がなくて実現しないのか。任期の問題なのか、プレッシャーなのか。

榊原: 明らかに助教同士で会う機会は少ないですよ。LSBM内でのコミュニケーションは活発ですが、一歩外に出ると知らない人ばかり。何か会う環境を作らないと他の分野の人たちと接するのは難しい気がします。

佐藤: やっぱりキャンパス公開の助教企画イベントはいいチャンスなんですよ(笑)



理想のコミュニケーションのために

佐藤: 他はどうなのでしょうかね？ 交流が活発な研究所ってご存知ですか？

渡邊: 僕の出身大学ではラボ間の交流が活発だっただけでなく、教授に

“先生”を付けず、全員を“さん付け”で呼ぶという伝統がありました。研究は対等なディスカッションが不可欠なので権威を持ち込まないという考え方です。留学したドイツの大学も自由な雰囲気、今の先端研にかなり近かった記憶があります。思い出補正がかかっている可能性もありますが。

榊原: 僕がフランスに留学した時も、ボスをファーストネームで呼んでいました。たしかにディスカッションはしやすかったですね。言いにくい研究結果を伝える時もあまり緊張せずに伝えられるので、ある程度はフランクな環境のほうが研究しやすいと思います。

白松: ある研究領域の会議でも“さん付け”で呼び合っていました。その会議では宿舎もあったのでたくさん友達ができ、実際に予算を取っていらっしゃる先生たちとのつながりもできました。共同研究をがつつりやるという意味では、さまざまな分野や立場の研究者が集まる研究所や大学を選ぶといいのかなと感じました。

佐藤: 神崎所長は僕たちにもかなりフランクに接してくださるので、この話が広報誌に載ったら「よし、じゃあ“さん付け”にしよう！」とおっしゃったりして(笑)。コラボレーションできるかどうかは別として、全く違う分野の人と話ができる場があるといいと思います。以前に1ヵ月ほど英国の大学へ行った時、全く異なる分野の人と一緒にご飯を食べる機会が何度もあって、楽しかったんですよ。先端研は敷地内に食堂が点在してお昼に顔を会わせることもほとんどないけど、一緒にご飯を食べるという物理的な機会があるだけでもかなり変わると思います。14号館の先端研カフェも、本当はもっと行きたいんですけどね。

渡邊: あの場所、使っていいんですか？

佐藤: もちろん。ただ、いつも外部らしき人たちがばかりで顔見知りがないんですよ。だから逆に使いづらい。もし皆さんが普段から先端研カフェを使っていて、「あ、〇〇さんがいる」という状況だったら、僕はいつでも喜んで行きます。

渡邊: 僕はカフェのことすら知らなかったのか…。

榊原: 僕だって、卓球場の存在は知っていても場所は知らないですよ。

白松: ENEOS ホールの奥です(笑)。

佐藤: だから、助教に限らず講師や特任の人たちも含めた掲示板とかSNSのグループのようなツールがあるだけでもコミュニケーションが変わると思うんですよ。実際の管理は大変そうだけど。

白松: 何より、助教は自分たちが出不精だと自覚すべきですね。

渡邊: たしかに。結論としては「助教みんなが出不精だ」と。

【後日談】

この座談会から約2ヶ月後、座談会メンバーが渴望していた「助教の会」が開催され、さらなる交流が育まれました。

撮影：飯島 雄二



想定外こそ想定内！？ 「先端研発・超人スポーツ」開発の舞台裏

2017年10月に30周年記念事業の1つとして行われたスポーツ交流イベント『先端研オリンピック』。そのうちの「先端研発・超人スポーツ」はハッカソン形式で作上げた先端研オリジナル競技でした。チームづくりから当日までの怒濤の日々をリーダーの巖淵准教授と辻特任助教に伺いました。



先端研オリンピック 超人スポーツ開発チーム

支援情報システム分野 巖淵 守 准教授(右) Mamoru Iwabuchi

ゲノムサイエンス分野 辻 真吾 特任助教(左) Shingo Tsuji

始めから「想定外」しか起こらない

「何でこのプロジェクトに入ったか正直わからないんですよ」。チームを率いた二人ともが同じことを言う。巖淵准教授は「稲見先生の講演で超人スポーツの話を知ったことがあると谷内江先生に話したら、アサインされました」。辻特任助教は「飲んだり食べたりするのが好きなので拡大ハッピーアワーの芋煮担当を希望したはずが、気がついたら超人スポーツ担当に…」。超人スポーツはもともと稲見教授が共同代表を務める団体で、すでに複数の競技がある。「それらが面白いのは分かっているけど、誰かの真似ではなく新しいことをしたかった」と辻特任助教。まずは5月のハッピーアワーでメンバー募集を行った。稲見研・檜山講師の概要説明に多くの学生が興味を持ち、その時点で手を挙げたのが6名、最終的には法学などの文系学生を含め25名になった。メンバーの学生が声をかけて小谷准教授など教員も参加。当初は誰

もが1つの種目を開発すると思っていたが「それが凡人だったんですね」と辻特任助教。ハッカソンで絞り込まれた4つのアイデアに稲見教授が当たり前のように「全部作りましょう」と言ったという。「アイデアを前に“難しい”ではなく“面白い”、むしろ難しいければ難しいほど面白いと考える。先端研っぽいですよ」と笑う巖淵准教授。「専門外だったり社会人院生で時間がなかったりで自分が役に立つのか不安ながらも参加する学生にいかにも楽しんでもらうか。躊躇のハードルを下げ、場の空気をドライブさせ、楽しさの勢いを増す。圧巻のハッカソンでした」。先端研オリンピックの競技参加者を募ると、3種目のうち超人スポーツだけが(仮)と表記されていたにも関わらずまさかの一番人気。「やっぱり研究者は未知のものに挑戦したいんですね」と話す辻特任助教だが、「万が一開発が間に合わなかったら、その可能性が十分にあったので(笑)、パンポンチームに参加者を引き受けてもらう約束を半ば無理やり取り付けました」と保険も忘れなかった。その後も

「先端研オリンピック」とは？

先端研30周年記念事業の一環として、谷内江 望 准教授をリーダーに行われた所内スポーツ交流イベント。競技参加者として登録した100名以上の先端研教員、スタッフ、学生たちが4つのチームに分かれて熱戦を繰り広げた。月1回開催の交流企画「ハッピーアワー」の拡大版として芋煮大会も同時開催され、大盛況。30周年記念事業のダークホースとして語り継がれている。

先端研オリンピック 競技種目

年齢・性別・運動神経に関わらず誰もが楽しめる

ゆるスポーツ

- > ベビーバスケット
- > ゾンビサッカー

日立の伝統スポーツ

パンポン

最新のテクノロジーを使って能力を拡張した人間が競い合う

超人スポーツ

- > BCI早押しクイズ
- > 超人ダーツ
- > 光学迷彩キャッチボール
- > EvachHuman

想定外がデフォルトで進む。

小谷研究室が所有するシステムを改造して格闘ゲームにするはずのBCI(Brain Computer Interface)チームは、ソフトウェア会社が海外で連絡が滞った挙げ句に大幅な改造はできないことが判明。さらには元のプログラムの欠陥も見つかるというおまけ付き。辻特任助教は「学生から『余裕でできると思ったのに大変です…』とSlackで報告されるたびに辛かった」と当時を語る。人工筋肉の開発者である稲見研・栗田研究員にアドバイスをもらいつつ進めた超人ダーツチームは、筋肉増強が難しいとわかり迷走。開催1週間前のリハーサルでは、階段避難車のEvac+Chairが会場の3号館大階段では競技不可能だとわかり、光学迷彩ドッジボールは画像処理のタイムラグで競技が成立しない壁にぶちあたる。ここでチームのおしりに火がついた。「やったことがないから心の拠り所がない。ずっと必死(笑)。学生時代の研究発表みたいだった」と巖淵准教授は振り返る。

「やはり先端研だよね！」という宿命

紆余曲折ありながら無事に迎えた開催当日は大盛況。しかし敏腕の辻リーダーは一步引いた視点で現場を見て「『この人たちちょっと頭おかしいんじゃないか?』って思ったんですよ(笑)。だって、頭に変なネット被って画面に向かってるし、腕に妙なものを装着して、隣にいる人は空気シュポシュポしてるし、ゴーグルつけてウロウロしてるし。おいおい、大丈夫か?って(笑)」。たしかに、何も知らずに会場を訪れた人には異様な光景かもしれない。「大人数で、徹夜する人もいるほど労力と時間をかけてこんなことをするのって、世界的に見てもある一定のスパンで見ても、先端研だけじゃないかって思ったんですよ」と辻特任助教。「ただ、時間や予算の制約があるにせよ、結構な頭脳が結集してがんばって作っても、まだ



▲まさかの参加希望者一番人気だった超人スポーツ。当日はもちろん大盛況だった。



▲進行について説明する巖淵准教授と辻特任助教は、見事なコンビネーションを発揮。

超人スポーツ開発チームリーダー

支援情報システム分野・巖淵 守 准教授(写真左)

障害のある人や高齢の人など、様々なバリアを抱える人々に役立つ支援技術に関する研究を行っている。広報委員会メンバーの一人だったことから、先端研オリンピックチームメンバーに選出された。2018年4月より(先端研関係者に惜しまれながら)早稲田大学教授に。

ゲノムサイエンス分野・辻 真吾 特任助教(写真右)

スタートアップ企業にてWebアプリの開発を経た後、生命情報科学で博士号を取得。現在は、主にがん研究分野における大規模データの解析を行う。オンライン講座でPythonを使ったデータサイエンス講座の講師を担当するなどの活動がありながら、超人スポーツ開発では全くこうした経歴を明かさなかった。「(開発者としての能力について)なぜ黙っていたのか!」(by 巖淵准教授)



▲超人スポーツになるはずだった幻の器具で辻特任助教に打ち負かされる巖淵准教授。

完成度は高くない。新しいものを作るのは難しいことなんだと、今ひひしと感じます」と話す。巖淵准教授は「稲見先生が既存概念を壊すトリックスター的な存在でした。心に火をつけてもらって、その心を、そしてその場を共有できたことに心動かされました。自分の研究を進める上でも、必ず今回の経験が役に立つと思います。例えば学生のアイデアに『いいね！全部やろう』とか(笑)。変に専門家然としたり、まじめにしなければいけないというのではなく、バカなことをやっているほうがむしろいい。先端研にはもともとそういう雰囲気があり、普通のことを言ったら叱られますよね？どれだけ人が考えていないことを生み出せるかを問われるという“先端研気質”というか」と話す。

「実際にそのプレッシャーは小さくないですよ。研究者も職員も常に“先端研らしさ”を背負っていると思います。30周年記念式典で多くの先輩方から指摘されたように『やはり先端研だよ！』と思ってもらえるかどうか。今回は30周年という環境があったけれど、トップランナーの人々は普段から自身のお金と労力を使って枠を外す試みを実践し、アウトプットもされています。次に機会があるとしたら、自分たちが楽しかったというだけではなく他の人にどんな価値を提供したかという振り返りも必要だし、最終的には社会還元となるアウトプットも求められてくるのでは」。その言葉に、現場に入り込む巖淵准教授の研究姿勢が垣間見える。「私の年齢になると」と続ける辻特任助教。「メールを読んで論文を書いて…と同じ毎日なので、今回は普段とは全く違う経験をしました。30周年委員になっていなかったら間違いなく参加していなかったですね。また何かやってるわ、と冷めた目で見て(笑)。自分の考えがガラッと変わりました。次に開催することになって少し前の私のような人がいたら『絶対に楽しいですよ』と自信を持って勧めますね。巻き込んでいただいて非常に感謝しています」。

体験を共有した同士

「この二人と中村・小坂研の森正人助教の三人で、チームの土台作りから開催まで、不安の中、回していた」という辻特任助教が今回最も印象に残ったことは何か。それは、紆余曲折の開発過程でも改善提案でも今後の展開でもなく「オリンピック当日の打ち上げ」らしい。「稲見先生が今でも一番好きなのは生命科学だとおっしゃってて。生命科学だと一番になれないので二番目に興味関心のある分野に進まれたそうです。すると、巖淵先生が工学からバリアフリーに転向したという話が出たりして。人に歴史ありだなあなんて思いました」と話す辻特任助教。その流れで、専門は生命科学系という顔をしていた辻特任助教が実はバリバリの情報系だと判明したそう。「本来は開発のリーダーになっていい人だったのに、なぜ黙ってたのかと(笑)。辻先生とはこれまで交流がなかったので、今回一緒にできて本当によかったです。やっぱり『委員になっていただけますか？』と聞くのはダメですよ。お願いします、でいいかない」と巖淵准教授が笑うと辻特任助教は「とにかく間に合ってよかったと話しながらビールを飲んだことが一番楽しかったですかね。次の先端研オリンピックの話は全く出なかったですけど」と照れ隠しのようなシニカルなコメントを返した。

二人の楽しいやりとり「競技者や当日手伝い組も含めて、今までに世の中にない競技を作り、体験できた数少ない同士です」という辻特任助教の言葉を実感する。今回開発された「光学迷彩キャッチボール」は、2018年度駒場リサーチキャンパス公開で「光学迷彩ドッジボール」として一般公開される。



▲「BCI早押しクイズ」の説明する辻特任助教。幾多の苦勞をまったく感じさせないクールかつシニカルな語り口が絶妙。



▲「学生さんに謝金を出してよかった。ボランティアではなく対価を払うのは必要」と話す辻特任助教を温かく見守る巖淵准教授。

そこが知りたい！ こんなはずじゃなかった？超人スポーツ開発秘ストーリー

先端研発・超人スポーツの4種目はハッカソン形式で開発されたため、最終的に、当初のアイデアからかけ離れた内容になったものがほとんど。その興味深い開発プロセスと苦勞のポイントを簡単にレビューします。

BCI早押しクイズ

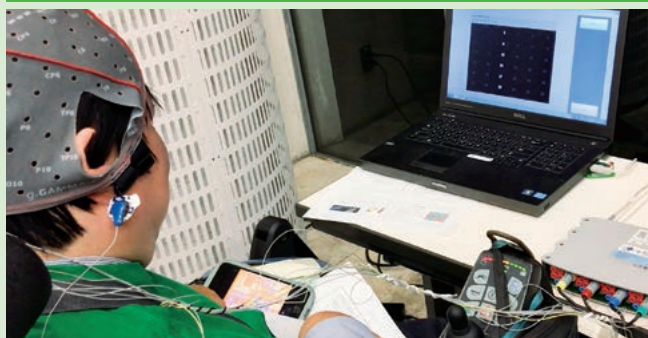
情報系と隠していた辻特任助教がBCI競技開発に意欲

念力で車を動かすとか、ARを使った格闘技系とか →
→ 専門用語を武器にした対戦 → 面白くて学べるゲーム

しかし！

- 開発会社が海外で改造の詳細確認に時間がかかる
- システムの改造が難しい
- 元々のプログラムにも問題発覚

問題番号を選ぶ早押しクイズに落ち着く



超人ダーツ

人工筋肉を開発した稲見研・栗田先生がチーム入り

人工筋肉を足につけたサッカー →
→ 足は難しいので腕相撲に → 腕相撲は危険なのでダーツに

しかし！

- そもそも筋力増強が難しい
- 筋力を空気ポンペで空気を送り邪魔する案に
- 空気ポンペが難しいのでペットボトルに

妨害者も筋力勝負のダーツで一件落着



EvacHuman

防災訓練で歩行困難者向け避難用具
Evac+Chairを知った巖淵准教授が提案

開発は順調に進行 → ルール作りがメイン →
→ 3号館の大階段で大がかりな競走に！

しかし！

- 開催1週間前のリハーサルで問題勃発
- 大階段は角度が緩やかすぎてEvac+Chairで降りられない

急遽、通常の階段を使用して競技開催



光学迷彩キャッチボール

Unity開発者の稲見研・築瀬先生がチーム入り

光学迷彩を使って何か開発したい → 水鉄砲で戦う →
→ 水はNGではないか？ → ドッジボールで行こう！

しかし！

- 開催1週間前のリハーサルで問題勃発
- HMDへの画像転送に0.2秒のタイムラグ発生
- ドッジボールは不可能…

キャッチボールに変更
当日、HMDの画像を壁に映し出すことは断念



英国 日立ケンブリッジ研究所 研究員による 「量子物理学セミナー」開催

2月16日、英国日立ケンブリッジ研究所の研究員によるセミナーを開催しました。当日は、先端研のフェローでもあるJoerg Wunderlich博士とFernando Gonzalez-Zalba博士が講師を務め、全国各地から研究者や学生が参加しました。日立ケンブリッジ研究所は日立ヨーロッパとケンブリッジ大学の共同研究所で、電子がもつ電氣的性質(電荷)と磁氣的性質(スピン)の双方を利用する技術分野であるスピントロニクスなど基礎物理分野の研究を展開しています。セミナーは、Joerg Wunderlich博士がAntiferromagnetic Spintronics、Fernando Gonzalez-Zalba博士がQuantum computing with silicon transistorをテーマに行われ、参加者は熱心に耳を傾けていました。(経営戦略企画室)



▲セミナーの様子



▲説明するFernando Gonzalez-Zalba 博士

ハラスメント防止研修会及び SD・FD講演会を開催

1月30日、ハラスメント防止研修会とSD(スタッフ・ディベロップメント)・FD(ファカルティ・ディベロップメント)講演会が先端研にて行われ、教授総会出席者及び関係職員が受講しました。ハラスメント相談所の長嶋あけみ特任専門職員によるハラスメント防止研修会では、セクシャルマイノリティへの理解と対応、アカデミックハラスメントにならないためにすべきことなどがデータと事例で示されました。SD・FD講演会では、対応困難な特性がある事例への留意点や工夫を学び、いかに学生の成長を支援するかについて、精神保険支援室の渡邊慶一郎准教授が講演しました。



▲セクシャルマイノリティへの理解と対応について講演する長嶋特任専門職員



▲事例が困難化すること防ぐためのポイントを説明する渡邊准教授

工学系研究科先端学際工学専攻 平成29年度学位記授与式を挙行

3月22日、午前中の雨が見事に上がった午後、大学院工学系研究科先端学際工学専攻の学位記授与式が挙行され、11人に学位記が授与されました。常務委員の高橋哲教授は祝辞で「この春、さまざまな場所で博士の学位が授与されています。しかし、あらゆる学問が集まる先端研で学んだ経験や多様なつながりを得た先端学際工学専攻の学位は、他とは異なる特別なカードです。責任感と存在感を持って世界に発信し、リーダーシップをとってほしい」とエールを送りました。



▲祝辞を述べる常務委員の高橋哲教授

留学生や外国人研究者が歌舞伎の「見得」を体験

2月23日、工学系研究科先端学際工学専攻による歌舞伎イベントが3号館南棟 ENEOSホールにて開催されました。留学生や外国人研究者と日本人学生・研究者、教職員との国際交流をはかる一環として毎年行われているイベントで、当日は約50名が参加しました。

平成29年度は、日本の伝統芸能である歌舞伎の鑑賞・体験が行われ、先端研のみならず、生産技術研究所所属の学生・研究者の方も参加いただきました。神崎亮平所長が簡単に歌舞伎について紹介した後、歌舞伎の所作体験やダイナミックな歌舞伎の一幕を経験した参加者からは、大きな歓声が上がっており、拍子木の音がホールいっぱいに木霊していました。イベント後には、演者さんとの写真撮影も行われ、日本の芸術、歌舞伎という新しい世界を知り満喫した様子で閉会しました。



▲歌舞伎の所作「見得」を体験する参加者



▲演目「春興鏡獅子」の一部

くまモン誕生祭2018で、 稲見・檜山研の「VRくまモン」がお披露目

3月10日・11日、熊本県で開催された「くまモン誕生祭2018」で、檜山敦講師(身体情報学分野)が開発した「VRくまモン」がお披露目され、蒲島郁夫熊本県知事をはじめ、誕生祭に参加したご当地キャラクターなどが仮想現実(VR)の世界でくまモンとふれあいました。檜山講師は、2017年9月にくまもとサプライズキャラクターであるくまモンの活躍の幅を広げるための新たな活動を研究する組織として熊本県庁に設置された「くまモン共有空間拡大ラボ(くまラボ)」のフェローに任命され、くまモンとふれあえる仮想現実の世界の開発を行っていました。



▲仮想現実でくまモンとふれあっている最中の蒲島郁夫知事



▲ゴーグルを謎の場所に装着してVRくまモンを楽しむ福岡県の「追い出し猫サクラ」

福島県いわき市と環境・エネルギー分野における 包括連携協定を締結

3月20日、東京大学先端科学技術研究センターと福島県いわき市は、環境・エネルギー分野における学術の振興、産業の発展などを通して、いわき地域はもとより福島県浜通り地域における活力ある個性豊かな地域形成に寄与することを目的とした連携協定を締結しました。今後は、メガワット級の風車実機コンポーネントを利用した実風車の理解と技術力向上、欧州メーカー標準になりつつあるGWO(風力発電技師など)における基本的な安全訓練 準拠の国内組織化を目指し、風車メンテナンス技術者の育成供給を行う国内初の取り組みを展開します。



▲写真左から、清水敏男いわき市長、プロジェクトリーダーとなる飯田誠特任准教授、神崎亮平先端研所長

人 事 情 報

H R

採用・任命・転入等

発令日	氏名	職名	受入研究室
2017年12月1日	澤田 有希子	助教	新谷研究室
2018年1月16日	高橋 優樹	特任助教	中村・宇佐見研究室
2018年3月1日	上田 宏生	講師	上田研究室
2018年3月1日	大澤 毅	特任准教授	大澤研究室
2018年3月1日	土居 リナ	学術支援 専門職員	児玉研究室
2018年3月1日	佐野 舞子	学術支援 専門職員	広報・情報室
2018年4月1日	藤田 敏郎	東大先端研 フェロー	
2018年4月1日	太田 禎生	准教授	太田研究室
2018年4月1日	田村 宏之	特任准教授	石北研究室
2018年4月1日	山崎 歴舟	特任講師	中村・宇佐見研究室
2018年4月1日	金 磊	助教	山下・セツ研究室
2018年4月1日	村上 久	特任助教	西成研究室
2018年4月1日	西本 光宏	特任助教	藤田研究室
2018年4月1日	河原崎 和歌子	特任助教	藤田研究室
2018年4月1日	福本 理恵	特任助教	中邑・近藤研究室
2018年4月1日	森脇 愛子	特任研究員	中邑・近藤研究室
2018年4月1日	田中 泰史	特任研究員	稲見・檜山研究室
2018年4月1日	塩田 裕介	特任研究員	神崎・高橋研究室
2018年4月1日	照月 大悟	特任研究員	神崎・高橋研究室
2018年4月1日	福岡 那奈	学術支援 専門職員	中邑・近藤研究室
2018年4月1日	戸部 美香	専門職員	企画調整チーム 教育研究支援担当
2018年4月1日	狩野 真二	上席係長	財務企画チーム プロジェクト執行室
2018年4月1日	鈴木 伸子	主任	企画調整チーム 図書室
2018年4月1日	松本 佳子	主任	財務企画チーム プロジェクト執行室
2018年4月1日	川口 健太郎	主任	施設・安全チーム 施設管理担当
2018年4月1日	佐野 摩里子	一般職員	施設・安全チーム 施設管理担当
2018年4月1日	岡松 絵里子	特任専門職員	経営戦略企画室
2018年4月1日	滝ヶ浦 正尚	産学官連携 協力員	経営戦略企画室(石川県研修派遣)
2018年4月1日	折笠 雄司	産学官連携 協力員	経営戦略企画室(いわき市研修派遣)

2018年2月28日	Wang Weiwei	特任研究員	
2018年2月28日	Dang Jingshuang	特任研究員	Shaanxi Normal University 准教授
2018年3月31日	児玉 龍彦	教授	東大先端研
2018年3月31日	浜窪 隆雄	教授	日本医科大学 先端医学研究所 教授
2018年3月31日	馬場 靖憲	教授	麗澤大学 経済学部経済学科 特任教授
2018年3月31日	巖淵 守	准教授	早稲田大学人間科学学術院 教授
2018年3月31日	堀内 恵子	助教	
2018年3月31日	増田 一之	助教	
2018年3月31日	鹿野 豊	特任准教授	慶應義塾大学 大学院理工学研究科 特任准教授
2018年3月31日	櫻井 健志	特任講師	東京農業大学 農学部デザイン農学科 准教授
2018年3月31日	庄司 靖	特任助教	産業技術総合研究所 太陽光発電研究センター 博士型任期付研究員
2018年3月31日	太期 健二	特任助教	日本医科大学 先端医学研究所 助教
2018年3月31日	唐 澤国	特任助教	Hanergy Shuangliu Thin-film Solar Cell R&D Center Expert
2018年3月31日	宮坂 貴文	特任助教	気象業務支援センター（非常勤）／ 東大先端研(短時間)
2018年3月31日	上田 浩平	特任研究員	Cordeliers Research Centre INSERM Postdoctoral fellow
2018年3月31日	吉田 勝尚	特任研究員	筑波大学 数理物質系 研究員
2018年3月31日	早田 敬太	特任研究員	日本医科大学 先端医学研究所 助教
2018年3月31日	三井 健一	特任研究員	首都大学東京 非常勤契約職員
2018年3月31日	福田 理絵	特任研究員	
2018年3月31日	白坂 将	特任研究員	大阪大学 大学院情報科学研究科 助教
2018年3月31日	竹内 真純	学術支援 専門職員	東大先端研(短時間)
2018年3月31日	丸山 拓人	学術支援 専門職員	
2018年3月31日	三ヶ尻 浩生	係長	東大教育・学生支援部入試課 入試実施チーム 係長
2018年3月31日	黒須 玲子	係長	東大工学系・情報理工学系等財務課 調達チーム 係長
2018年3月31日	山口 淳	主任	東大医学部情報サービス係 主任
2018年3月31日	西野 真理	主任	大学入試センター総務企画部 財務課施設管理係 主任
2018年3月31日	村田 真奈	特任専門職員	
2018年3月31日	須藤 杏寿	特任専門職員	
2018年3月31日	小倉 優太	産学官連携 協力員	石川県県庁企画課

退職・転出

発令日	氏名	職名	転出先
2017年12月31日	横矢 直人	助教	理化学研究所 革新知能統合研究センター ユニットリーダー
2017年12月31日	Rattanakul Surapong	特任研究員	King Mongkut's University of Technology Thonbur 講師
2017年12月31日	Yusufali Farzana	学術支援職員	
2018年2月15日	佐藤 修	特任研究員	アイソトープ総合センター 特任研究員

受 賞

W I N N I N G

2018年2月20日・27日

佐々木 智也 学術支援専門職員、稲見 昌彦 教授(身体情報学分野)らが2017アジアデジタルアート大賞展Fukuokaにてインタラクティブアート部門 大賞/総務大臣賞を受賞

受賞作品: MetaLimbs

2017年11月26日

安藤 規泰 講師(生命知能システム分野)が、日本比較生理生化学会2017年度吉田奨励賞を受賞

受賞研究:生物-機械ハイブリッドロボットによる適応行動メカニズムの理解

2017年11月

玉置 亮 助教(新エネルギー分野)が、PVSEC-27(27th International Photovoltaic Science and Engineering Conference)にてYoung Researcher Paper Awardを受賞

受賞発表名:Full Spectrum Quantum Efficiency Mapping on Type-II Quantum Nanostructure Solar Cells

活動報告

REPORT

【プレスリリース】 <http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/pressrelease/>

2018年3月13日

中村 泰信 教授、河野 信吾 大学院生(量子情報理工学分野)

◇マイクロ波光子を吸収せず検出することに成功 ～マイクロ波単一光子の量子非破壊測定を実現～

2018年2月2日

宇佐見 康二 准教授(量子情報理工学分野)

◇ハイブリッド量子技術による核磁気共鳴のレーザー光検出 ― 化学分析や磁気共鳴画像(MRI)診断の高感度化に期待 ―

2018年1月25日

油谷 浩幸 教授(ゲノムサイエンス分野)

◇東京大学アイソトープ総合センター、東京大学先端科学技術研究センター、神奈川県立がんセンターとブライトパス、完全個別化がんワクチン療法に用いるネオアンチゲン同定法に関する共同研究を開始

2018年1月18日

中邑・近藤研究室(人間支援工学分野)

◇ICTを活用して障がい児の学習・生活支援を行う「魔法のプロジェクト2018～魔法のダイアリー～」協力校を募集 ～児童・生徒の成長や指導記録を活用することで継続的な支援を実施～

2018年1月9日

星 貴之 客員研究員(身体情報学分野)

◇空間を飛び回るミリメートルサイズのLED光源を実現 ～手で触れる空中ディスプレイ向けの発光画素への応用に期待～

【研究成果】

2018年2月22日

内田 聡 特任教授、松下 智紀 助教、近藤 高志 教授(高機能材料分野)ほか

◇ペロブスカイト太陽電池の結晶相に「超格子構造」を発見

2017年12月25日

丸茂 丈史 特任准教授、藤田 敏郎 名誉教授(臨床エビジェネティクス講座)

◇糖尿病性腎症で生じる核内受容体PXRのDNAメチル化異常と代謝遺伝子変化を明らかに

【トピックス】

2018年1月31日

小泉研究室(共創まちづくり分野)が電通デジタルと共に、オープンイノベーション創出のための共同研究組織「共創イノベーションラボ」を設立

2017年12月22日

先端研・石川県・公益財団法人石川県産業創出支援機構が実施する「東京大学先端科学技術研究センター共同研究創出支援事業」の採択企業が決定

【新聞掲載】

2018年2月25日

【東京新聞】テクノロジーが変えるバリアフリー 技術は人を平等にする
◇中邑 賢龍 教授(人間支援工学分野)

2018年2月21日

【日本経済新聞】裁量労働再調査せず 政権、雑な法案審議
◇牧原 出 教授(政治行政システム分野)

2018年1月30日

【中部新聞】私たちの平成 能力至上社会を生きる(7)「この子は働けるのか」
◇熊谷 晋一郎 准教授(当事者研究分野)

2018年1月20日

【日本経済新聞】故人のぬくもり、デジタルで再び
◇瓜生 大輔 助教(身体情報学分野)

2018年1月13日

【読売新聞】東大食に南相馬産米
◇児玉 龍彦 教授(システム生物医学分野)

2018年1月13日

【朝日新聞】変わる進学 大学入学共通テスト「多様な生徒の排除懸念」
◇近藤 武夫 准教授(人間支援工学分野)

2017年12月20日

【読売新聞】論点:線引き難しい「軍事」と「民生」
◇玉井 克哉 教授(知的財産法分野)

新刊

BOOK

『法の番人として生きる 大森政輔 元内閣法制局長官回顧録』

牧原 出 (編)／岩波書店／2018.2.21 刊

『御厨政治史学とは何か』

東京大学先端科学技術研究センター 御厨貴研究室 (編)／吉田書店／2017.12.26 刊

先端研ウェブサイトで最新の活動状況をご覧ください

知られざる先端研

＜所長室URA 編＞

2017年4月、先端研所長室にURA(リサーチ・アドミニストレーター)が着任。毎日、どこかで、何かが起こっている先端研で、研究者が研究に専念できる環境づくりに奔走する所長室URAの仕事をご紹介します。



東京大学URA
喜多山 篤 特任助教

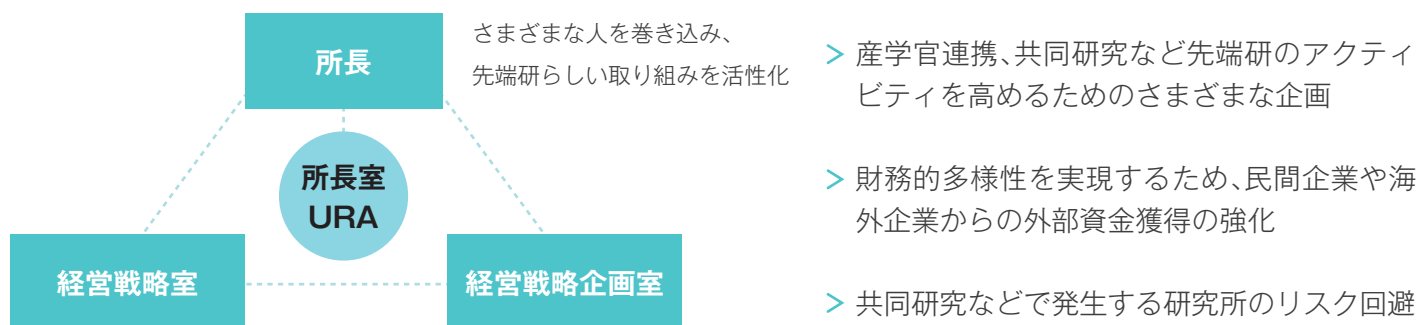
所長室URA・喜多山さん略歴

東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻修了後、東大助手、京大URA等を経て2017年4月に東京大学URAとして先端研所長室に着任。モットーは『越境』。出張のおみやげ、特においしいものへのセンスが光るとのウワサあり。

URAとは

大学等における研究マネジメントの専門人材で、University Research Administratorを略して「URA」と呼ばれている。東京大学では適正な審査を行い、定められた業務を行う能力に応じてURAとして認定。

先端研での位置づけと主な業務内容



現在進行中の取り組み

外部資金獲得！

新しい社会連携研究部門

海外からの外部資金獲得のためには、まずは海外のニーズを知ることが不可欠。現在は再生可能エネルギー燃料グローバルサプライチェーンの確立を目指す、社会連携研究部門の創設に向けて奮闘中。

研究者の楽園への第一歩！

インクルーシブデザインラボ

優秀な研究者が障害を理由に研究が滞るような環境は改善すべきだし、障害者が使いやすいラボは健常者にとっても使いやすいとの考え方から、ロボティクスも取り入れた新たなラボ構想に取り組む。

もっと異分野融合！

若手アライアンス

情報生命科学の若手研究者たちによる分野横断的オープンラボが4月からスタートしています。設備の共有から運営、連携など、さまざまな面でのサポートを実践中。

これから
進めたい！

所内コミュニケーション活性化

「同じ釜の飯」理論(?)で所内の若手研究者をつなげる案や、所内と先端研OBOGが交流するSNSなどの企画を進行中。

コネクションの質と量のアップ

来日著名研究者の宿泊施設をソーシャルな形で展開する方法に加え、異分野の教員と学生間でのトークを楽しむランチ会、社会実装勉強会、先端研SDGs研究会(仮)などなどを企画しています。



先端とは何か

身体情報学分野 稲見 昌彦 教授



先端的体験

初めて先端研の門を潜ったのは修士課程の頃、情報物理学分野の舘暉研究室を見学したときだった。今では先端研カフェとなっている14号館の実験室に、世界初のテレグジスタンスシステム『TELESAR』が設置されていた。頭部搭載型ディスプレイ(HMD)を装着し、石川啄木の『一握の砂』ではないが自らの手をじっと見ると、操作者の動きと同期する隣の人型ロボットのカメラを通し、ロボットの手を眺めることになる。つまり自分の手がロボットハンドに「変身」する。さらにHMDで周囲を見渡すと、隣に見慣れた背中が見え、一息ついたあとにそれが自分の背中であることに気づく。主観的位置がロボットの位置に完全に投射され、まさに幽体離脱体験である。

ロボットに変化した手を凝視し、自らの背を客観視することで「自己」や「存在」といった哲学上の難題に対し工学的にもアプローチしうることには衝撃を受けた。是非この分野を深く学びたいと考え、先端学際工学専攻への進学を決意した。入学後は講義やオープンハウスなどで幅広い分野の教員、学生に接することで、自らの研究者としての立ち位置や研究分野の意義を、それぞれテレグジスタンスのように客観視点で眺めることができた。

そして入学してから奇しくもちょうど20年後の2016年4月、先端研に教員として着任した。学生時代幾度も夜を明かした場で再び研究を行う機会を頂いたことに大きな喜びを感じている。20年ぶりに先端研に居を構え、学生時代は当然のように受け入れていた先端研の「先端」とは何か、思いを巡らせている。例えば私が学生時代に体験したTELESARは、当

時すでに製作から5年以上経過してHMDにも多くの体験者の汗が染み込んでおり、必ずしも最新鋭のシステムとはいえなかった。しかしながら同等以上の性能のシステムは世界には存在せず、「最先端」であり続けていた。

三十周年を迎えた先端研も、もはや「新しい研究所」ではない。しかしながら、還流などによる研究分野の新陳代謝により、教員や学生や社会に最先端の体験を提供する場でありつつある。この「先端的体験」を提供するコンパクトな場としてふと想起したのがコンビニエンスストアである。棚には食品、雑誌から文房具まで魅力的な新製品がところ狭しと並び、特段用事が無くてもふらりと立ち寄って、買うつもりもないものを思わず購入してしまう。なるほど、東京大学が最高級の品ぞろえを誇り、少しかしこまってお出かけする老舗の百貨店とするならば、先端研は普段着で気楽に立ち寄れる知のコンビニであっても良いかもしれない。百貨店だとフロアごとに商品構成がガラリと変わり全体を回ろうと思ったら半日がかかりだが、コンビニなら一覧性も高く、5分も歩けば新しい商品をチェックできるし、予定にない商品や人との出会いもあり毎日でも寄ってしまう。

新しくインパクトのある研究成果、魅力的なスタッフや学生は先端研の重要な構成要素である。しかしその真価は先端研でしか味わえないライブ体験にこそあると考える。この時間、空間との関係性としての体験は、複製できない価値である。「先端的体験」を提供する知のコンビニ、先端研に貢献しつつ楽しみ尽くしたい。

未来の先端人たちへ

2017年度で先端研を定年退職された3人の先生。本当に名残惜しく、まだまだ教えていただきたいことがたくさんある気がします。永年にわたるご功績に心から敬意を表し、今回は特別企画として先端研および未来の先端人へのメッセージをご紹介します。



多次元の研究者に

システム生物医学分野 教授 児玉 龍彦

これからの科学は、歴史をもったマルチレイヤー(多層的)な問題を解くことです。レイヤーを抜けるたびに変化しているターゲットです。頭の中のもやもやしたイメージにさまざまな角度から光を投射しては、よりシャープなイメージにすることが求められます。でも相手はダイナミックに動いていて、表面から見ていただけでは、内部のメカニズムはわかりません。角度を変えて見るために、ダブルメジャー、トリプルメジャーは当たり前前に求められますし、シミュレーションや計測方法も勉強しなくてはなりません。装置も設備もあります。自分一人だけでなく、研究者もネットワークをつくる時代です。先端研が若い研究者の新しいプラットフォームとなること、そのためのダイナミックな組織となることを期待します。

イマジネーションを広げること

計量生物医学分野 教授 浜窪 隆雄

奇しくも、このメッセージを書こうとしているときに、部屋の近くで行われている改装工事の音が、新時代の槌音のように感じられます。それは、いい響きであり、そうならなければいけないと思います。世界の動きが、身の回りに急加速的に具体的に感じられつつあります。起こりつつある変革に対応していくだけでなく、未来を先導していかなければならないし、またそうすることが楽しくやりがいがあるはずだと思います。先端研は、新しいことにチャレンジできる数少ない組織です。ぶれずに、想像力を最大限に広げて世界に向けて発信してください。



振り出しに戻る

科学技術論・科学技術政策分野 教授 馬場 靖憲

開発学を学びに英国のサセックス大学へ行ってみれば、博士論文は、折から景気の良かった日本産業の分析で書くことに。結果的に、開発のIDSからイノベーションのSPRUへと転籍。帰国後、片足を総合工学(人工物工学研究センター)に置き、工学系との長い付き合いを開始する。さらに、輝きを失う日本企業の実状を受けて、研究を次第にSPRUで習い覚えた科学政策へとシフトする。思えば「あいまいさ」を活かした、ある意味、「ゆらぎ」に富んだ研究・教育生活であった。最近では、アフリカ開発におけるSTIの役割について講演依頼が舞い込み、実験国家、中国の未曾有の台頭によって様相が一変した開発学で、何が出来るか、にわか勉強を始めたところである。

編集後記



広報委員 巖淵 守 准教授
(支援情報システム分野)

本号では、2017年度に定年退職された三人の先生方からの貴重なお言葉をいただきました。先端とは何かを私達に教えて下さった先生方に感謝を申し上げます。私事で恐縮ですが、私も異動のために、この春先端研を離れることとなりました。自らの力不足を常々認識しながらも、「先端研でなければできないことを世に創りだす」ことを日々意識できる、

意識しなければならない恵まれた環境にこれまで参画できたことは非常に有難いことと改めて感じています。教職員の皆様と学生さん、また外部から訪ねて下さった沢山の方々との素晴らしい出会いにも恵まれました。これからも変わり続けることで先端を生み出し、社会を変える力となる先端研を願っています。本当にありがとうございました。

東京大学先端科学技術研究センターについて

2017年に発足30周年を迎えた東京大学先端科学技術研究センター(略称:先端研)は、「科学と技術のハーモニーで人と社会をつなぎ、未来を形にする」ことを使命とする研究所です。最大の特徴は研究者や研究分野の多様性にあり、理工系の先端研究から社会科学やバリアフリーという未来の社会システムに関わる研究まで、基礎から応用に至る多様な研究を積極的に推進しています。

先端研ニュース 2018 Vol.2 通巻102号 発行日:2018年4月20日

ISSN 1880-540X

© 東京大学先端科学技術研究センター
転載希望のお問い合わせ
press@rcast.u-tokyo.ac.jp



この冊子は植物インキを
使用しています。

発行所: 東京大学先端科学技術研究センター 〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1 <http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp>
編集: 広報委員会[中村尚(委員長)、岡田至崇、高橋哲、池内恵、ティクシエ三田アニエス、巖淵守、谷内江望、セツ ジイヨン、村山育子、山田東子、佐野舞子]
表紙: 先端研13号館と桜(撮影:宇戸 浩二)